

10 おわりに《出会いに感謝して》

授業をビデオに撮り、その授業記録を掘り起こす作業、そのことを始めてやったのが、今から5年前、藍住中学校での文部省指定同和教育研究発表会での公開授業であった。あの日の授業も「水平社宣言」についてであった。先輩の先生が、当時は今ほどビデオカメラもコンパクトではなかった状況で、重量感のあるビデオカメラを抱えて1時間の授業を撮ってくれたことが懐かしく思い出される。

授業を記録に収め、授業記録を後々に残していく取り組みの始まりが、藍住中学校での文部省指定同和教育研究発表会の「水平社宣言」の授業であった。その営みの中で一つ一つの授業に関わって、当時の生徒の姿がいつも浮かんでくる。そのことが私の大きな原動力となっている。かつて出会った生徒と、今、目の前にいる生徒とが重なったり、また今、目の前にいる生徒を通して、かつて出会った生徒はどうしているだろうかという思いに浸ることがたびたびである。あたり前のことだが道徳の学習や同和問題の学習は、常に生徒と共に築き上げていくものだという意識がある。

5年前、共に「水平社宣言」の授業に取り組んだ生徒が、本年度成人を迎えた。1月15日の成人の日、成人式を終えた姿で、4人の生徒が我が家を訪ねてくれる。毎年のように顔を見せいろいろな思いを話していた生徒たちであるが、成人式の日となると当時のさまざまな思いが込み上げる。今までのことが走馬燈のようによみがえってくる。5年前の出来事の一つ一つが懐かしい。つい昨日のことものようにも思えてくる。すっかり大人になった顔立ちの中に、中学時代と同じ表情が浮かび上がってくる。「5年前、この子らの笑顔に支えられて毎日の教育実践を頑張ることができたんだ」と当時のことがしみじみと思い出されてくる。

思い出話に花が咲く中で、一人の生徒が、「先生、文部同研のビデオあるでしょう。二十歳になったら見せてやると言っていたビデオ……」と話題は、5年前の文部省指定同和教育研究発表会の授業のことに移る。あの授業は、私にとってもわすれることのできない授業だ。授業記録は当時の県教育委員会の指導資料などにも紹介され、今も大切にその一つ一つを読み返すことがたびたびある。しかし、そのビデオを見るのは、私にとっても何年ぶりかであった。テレビの画面に、5年前の教室、5年前の生徒の姿、そして当時の私の姿が映し出される。顔から火が出るぐらい恥ずかしくなる授業だ。私自身顔を赤くしながらも、私はその授業の一こま一こまに思いをはせながら、目を輝かせて一生懸命画面を追う生徒の姿に胸が熱くなった。

共にビデオを見ている一人の生徒の発言の場面が映し出される。心の中に当時のことが、いっぱいよみがえってきたのだろう。とたんに目に涙がいつぱいたまってくる。その涙でキラキラ輝いた眼差しを見たとき、授業を記録に残せたことが嬉しくてならなかった。

記録に残すこと、それは時代を越えて、歳月を越えて、さわやかな感動に浸ることができる。今の3年B組の生徒とも、いつかこのようなときを過ぎす日がやってくるだろう。そのときは部落差別は、確実になくなっているという喜びをかみしめられるようにもっともっと頑張らねば

と思う。

1991年度、板野中学校3年B組での1年間の教育の営み。それは今までの同和問題学習の積み上げが一つ一つ花開いていった1年であるように思う。その営みの中で、私自身まだまだ力をつけなければと思うことがたびたびであった。その中で私は私なりに大きな一歩を踏み出せた1年である。

この1年の一日一日の流れを振り返るとき、まず思うことは、これほど忙しい1年はずっとなかったということだ。板野郡同和教育研究大会の公開授業、徳島県中学校道徳教育研究大会の公開授業、全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業等の授業者として、全日本中学校道徳教育研究大会運営委員会の事務局として、自分自身よく頑張ってくれたものだと思う。幾度か挫折そうになったり、投げやりになったこともある。そのときの私を励まし支えてくれたのは、私の周りにいるすばらしき人々である。この1年間程、人の支えや励ましを有り難く感じたことはない。私は多くの人の励ましや支えの中で生きていることをしみじみと感じ続けた1年である。

特に全日本中学校道徳教育研究大会の前にいただいた励ましの言葉は、その苦しみが大きかっただけに私の心に染み込んでいった。当時の教育記録（週録）にも、その思いが綿々と綴られている。

《全日本中学校道徳教育研究大会を間近にひかえて、多くの先生方の励ましが嬉しい。ただただ感謝するだけだ。背中に徳島県中学校道徳教育研究会を背負っているという思い。プレッシャーは大きい。しかしそのプレッシャーよりも遙かに授業をやらせてもらえるという喜びの方が大きい。多くの人々の支えの中で生きていること、励まされていること、特に板野中学校の先生方には感謝の言葉しかない。いろいろな面での支えや励ましを受けていることが有り難い。我生かされて生きるなり、感謝の中に人生の峠を越える。》

またさまざまな雑音の中で揺れたときもあった。教育記録（週録）の次のページには揺れる思いが記されている。

《全日本中学校道徳教育研究大会が近づいてくるイライラしてくる。どうしてこんなに苦しまなければならないのか。大会事務局と大会授業者、「お前、ほんまにようやるのお。」「よっぽど授業が好きなんじゃなあ。」さまざまな雑音が入ってくる。「誰が好きですか。」「何でここまでせないかんのか。」弱い自分が顔を出す。

しばらくすると、また気を取り直して、「こんな檜舞台に立たせてくれることは最初で最後かもしれない。」「こんな授業は頼んでもやらせてもらえるものではないんだ。」「3年B組の生徒たちと一生の絆となるような授業で答えを出そう。」そんな思いを自分に言い聞かせるように自らを励ます。揺れに揺れている。

夜、書物を整理していると、何通かの手紙が出てくる。瀬戸中学校で出会った生徒からの手紙、藍住中学校で出会った生徒からの手紙であった。その手紙の一つ一つを読み返していく。その生徒たちと歩んだ頃が当時の授業と重なって、繰り返し繰り返し頭の中に浮かんでくる。私の言葉の一つ一つを反芻するように、私の授業を支えとして頑張っている生徒の存在が嬉しくてならな

かった。このために日々の授業、人間を学ぶことをやっているのではない。一時の感情に流されて大切なものを見失ってどうする。「またいつか先生の授業を受けてみたい。」と記してくれたAさん（瀬戸中で出会った）たちの言葉がたまらなく嬉しい。私はこの生徒たちの存在がある限り、決して負けない。挫けることもない。天命に安んじて人事を尽くす。》

また、7月6日（土）に開かれた全日本中学校道徳教育研究会理事会に第25回全日本中学校道徳教育研究大会運営委員会事務局並びに特別公開授業の授業者として参加させていただいたときの感動も忘れることない。全日本中学校道徳教育研究会の歴代の会長の先生方との語らいの時間、高橋先生（第5代全日本中学校道徳教育研究会会長）、原先生（第8代全日本中学校道徳教育研究会会長）、冨田先生（第12代全日本中学校道徳教育研究会会長）の言葉、「全国大会では、あなたの思いや願いの滲み出た授業、森口健司の道徳授業を見せてくださいよ。」この言葉はどれほど私に勇気をくれたことか。そして、道徳授業に寄せる私の思いをじっくりと聞いてくださり、私の言葉に熱い思いで応えてくださったこと、本当に胸がいっぱいになった。このような先生方の存在があるから、どんな厳しい峠と向き合っても、生きがいや喜びを感じて生きていくことができるんだと思う。人を知ること、人と出会うこと、それが人間として生きる喜びなんだ。そんなことをしみじみ思った全日本中学校道徳教育研究会理事会への参加となっている。

この1年、私は多くの人々の励ましや支え、その思いの中で一つ一つの峠を越えてきた。本年度最後のイベントとなった徳島県中学校同和教育研究大会が終わったとき、私はこの1年の記録をまとめてみようという気持ちになった。それまでは記録としてまとめてみたいという漠然とした願いは持っていた。その願いは徳島県中学校同和教育研究大会の授業を通して決定的なものとなった。それは授業実践の記録を通して、この1年の歩みを明らかにすることによって、私を支え励ましてくれた人たちに応えていきたいと思ったし、授業に取り組んできた私の思いの表面的な部分だけでなく、私の心の奥に今も脈々と流れている願いをできるだけ多くの先生方にわかってほしかったからである。

私はこの異常なまでに忙しかった1年をやれやれという形で終わらせたくない。この1年の営みを支えとして、また新たな1年へ確かな一歩を踏み出したい。「3年B組の絆」と黒板に記して、第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業は終わった。私はこれからも毎年このようなクラスをつくっていきたい。決してこの歩みをゆるめることがあってはならない。それが私を信頼して、私に自分の本当の思いをぶつけてきた3年B組の生徒たちを励まし続けることになると信じる。

この冊子「よろこび」には〈第1号〉とする。それはこれからも、この授業実践の記録をまとめ続けるということだ。私が生徒に語った言葉、「私は自分のすべてをぶつけて、生涯差別解消に向けて闘い続ける。」この言葉を私自身の本当の生き方にしていくためにも、私はこの授業実践の記録「よろこび」の号を重ねていきたい。今年がスタートである。

（1992年3月 森口 健司）